

『枕草子』の言説
—「雪山」章段の分析から—

一、はじめに

『枕草子』研究は、戦前から続いた、諸本間の優劣や作者清少納言の執筆意図を探る研究から、テキストを「言語として現象する(場)」¹⁾として捉え、テキスト中の表現論理を探る研究へと近年移行している²⁾。こうした研究は『枕草子』を自立した構造を有するテキストとし、作者の意図に還元されないテキスト中の表現論理に着目する点で『枕草子』研究史上画期をなすものであった。しかし一方でこのテキスト論的研究も、テキスト中の内的諸関係からテキスト独自の構造・論理を検討し、その表現特性を探っていくことが中心であり、外部諸テキストとの関連にほとんど言及されていないのが現状である。そのため、テキスト『枕草子』の独自性を言い立てる点で、実体的『枕草子』論とほぼ方向を同じくするといった陥穽にはまっていると指摘しうる³⁾。これは、一条朝という時代の言説空間中に『枕草子』が位置づいているといった、言語の存在の側面に対する認識が希薄であることが要因として挙げられよう。

武久 康高
(広島大学大学院)

こうした研究状況の中で、稿者は同時代の諸テキストに『枕草子』と同様の言表が散見されるといった事実注目する。これはある事象や「現実」を一定のままざしの下で認識し、その概念と結びついた言葉で表現していることに他ならない。つまり『枕草子』の表現は、同時代に存在するままざしを外部諸テキストと共有しているのである。さらに重要視すべき点は、このままざし自体がある(「世界観」⁴⁾を含んでいることである。ここから、同時代の諸テキストとその言表を同じくする『枕草子』上の表現には、それ自体に同種の(「世界観」)が内包されているとすることができよう。本稿で問題とするのは、この言表自体に内包されている(「世界観」)のあり様。換言すると言語の「言説的厚み」⁵⁾を検討していくのである。

さて、このように『枕草子』上に存在する表現の実際を視野に入れると、従来のようにテキスト中の内的諸関係の検討のみから表現の特性を探っていくのではなく、外部諸テキストとの関係を視野に入れて『枕草子』上の表現を検討していく必要性が了解されよう。そこでは『枕草子』に認められる言表がどのような(「世界観」)に関っているのか、またそうした言表が

存在することにより一体どのような世界像を『枕草子』の〈話者〉が構築しているのか、さらにそれが時代の言説空間中でのどのような位相を占めているのか検討することを、『枕草子』における表現論の目標として定めることができる。本稿はこうした観点から『枕草子』の表現を考察するものである。

なお本稿で使う用語について簡単に定義しておく。

〈話者〉

テキスト上の様々な〈言表主体〉の貌を演じ、テキスト全体を包括する機能主体⁵⁵。〈話者〉は、同時代の言説空間と対話、もしくは認知参照という行為を通じて、表現の折々でそれぞれの言表を担う〈言表主体〉を演じ、テキスト空間を構築していく。

〈言表主体〉

発話された言葉は、言説を編成している他言表と関係をつなぐことにより、新たに言説を編成する言表として位置付けられる。その際、言表は機能を發揮する。この言表の機能こそ、客観的な「現実」であるとか「真実」であるかのように物事を幻視させていく、言説の力とも言うべきものである。ここである言葉が自らを言表として存在させるため、他言表と結びつく主体のことを〈言表主体〉とする⁵⁶。なおこの〈言表主体〉をテキスト生成の側面から捉えると、〈話者〉により場面場面に応じてテキスト上で演じられ、そこに自ら担う言表に基づいた世界像を構築していく主体と言えらる。以下、実際に『枕草子』の一章段を分析することによって、〈言表主体〉を演じる〈話者〉のあり様を検討していくこととする。

二、「雪山」章段の分析

A、聖代に基づく文化空間

「雪山」章段(八二段、八三段)⁵⁷は、雪山の存続期間をめぐる清少納言ら定子女房達の議論およびその動勢が語られる話を中心として、常陸の介が登場し定子空間から排除されるまでの一連のエピソードや、斎院から新年の便りが届くエピソードなど、いくつかの話が混在している章段である⁵⁸。本稿では、「雪山」章段の中心話題である雪山議論およびその動勢を語る話に着目し、これがどのような言表として機能し、いかなる世界像構築に寄与しているのか検討する。

八三段は、雪が「いみじう降り」、職の御曹司でも雪山を作ったという語りからはじまる章段である。

師走の十余日のほどに、雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、楳にいと多く置くを、「同じくは、庭にまことの山を作らせ侍らん」とて、侍召して、仰せ言にて言へば、集りて作る。

(中略—引用者)

さて、その山作りたる日、御使に、式部の丞忠隆参りたれば、苗さし出だして、物など言ふに、「今日、雪の山作らせ給はぬ所なんなき。御前の壺にも作らせ給へり。東宮にも、弘徽殿にも作られたり。京極殿にも作らせ給へりけり」など言へば、

ここにのみ珍らしと見る雪の山所々にふりにけるかな

と、かたはらなる人して言はずれば、たびたび傾きて、「返しはつかうまつりけがさじ。あざれたり。御簾の前にて、人にを語り侍らん」とて、立ちにき。歌いみじう好むと聞くものを、あやし。御前に聞こし召して、「いみじうよくとぞ思ひつらん」とぞ宣たまはする。(八三段)

引用箇所冒頭、中宮の命として職の御曹司に雪山を作らせる清少納言の様子が語られる。これは、定子の下に訪れた帝の「御使」の報告、つまり雪山作りが「御前の壺」や「東宮」「弘徽殿」「京極殿」といった内裏や有力貴族の邸でも行われたことが後に語られることにより、雅という点において、職の御曹司空間が内裏と同質の空間としてテクスト上に構築されていると言えるのであるが、一方で諸注が示すように¹⁵⁾、雪山作りは同時代の他テクストにおいても見ることができ、例として『源氏物語』「朝顔」を挙げる。

「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたる事なれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何のをりをりにつけても、口惜しう飽かずもあるかな。(中略―引用者)うち頼みきこえて、とある事かかるをりにつけて、何ことも聞こえ通ひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおひれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを、」
 (『源氏物語』朝顔)

源氏が庭の雪を見て、藤壺を想起する場面。ここではまず、雪山作り自体「世に古りたる事」であるにも関わらず、藤壺が行うと「めづらし」とい

う感想をもったことが語られ、その後「深うよしづきたる」藤壺の様子が賛美されている。

ここで、雪山作り自体は「世に古りたる事」とする源氏の発言に注目したい。この発言から、当時雪山作りが雅な遊びとして認識されていたが、その一方で新鮮味がないと受け止められていたことが窺えよう。こうしたまなざしは「雪山」章段にも影響していると考えられる。本章段の清少納言は、内裏をはじめとして所々で雪山作りが行われていることを聞き、「ここにのみ珍らしと見る雪の山所々にふりにけるかな」と歌う。この結句「ふりにけるかな」には、雪が「降りにける」と、職の御曹司の雪山が「古りにける」(新鮮味がなくなってしまう)という両義が掛かっていると捉えられるのであるが¹⁶⁾、後者の意味が詠み込まれる語りの背景―職の御曹司の雪山が新鮮味のないものとなってしまうこと―には、前述した雪山作り自体に対する「世に古りたる事」というまなざしが影響していると思定できる。

さて、雅な遊びではあるが新鮮味に欠ける雪山作りに対して、藤壺は持ち前の「深うよしづきたる」才覚により「めづらし」きものとした。一方清少納言はどうであろうか。しかしこの「雪山」章段における清少納言像を検討する前に、まず本章段に認められる言説の位相を確認しておくこととする。

次に引用する箇所では、定子と女房達が雪山存続の期間について議論する様子が語られている。

「これ、いつまでありなん」と人々に宣たまはするに、「十日はありなん」「十余日はありなん」など、ただこのころのほどを、ある限り申すに、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十余日までは侍りなん」と申すを、

御前にも、えさはあらじ、と思し召したり。女房はすべて、「年の内、つごもりまでもえあらじ」とのみ申すに、あまり遠くも申しつるかな、げに、えしもやあらざらん、ついたちなどぞ言ふべかりける、と下には思へど、さはれ、さまでなくとも、いひそめてんことは、とて、かたうあらがひつ。

(八三段)

まさしく消閑の興といったところだが、ここに認められる、中宮を中心とし女房達が雅な素材をもとに議論する語り口は、同時代の他テキストにも見ることができる。

かやうの女言にて、乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尽くして、えも言ひやらす。ただ、浅はかなる若人どもは死にかへりゆかしがれど、上のも、宮のも、片はしをだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

大臣参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへども、をかしく思して、「同じくは、御前にてこの勝負定めむ」とのたまひなりぬ。

『源氏物語』絵合

引用は『源氏物語』「絵合」。中宮(藤壺)の前で女房達が物語絵の優劣を争う場面である。ここで注目したいのは、中宮をも含めた女性同士の議論を「かやうの女言」とチーム化して捉えていることである。つまり、女性達はこうしたとりとめのない議論をするものだというまなざしが、当時存在していたことが窺えよう。ここから、このまなざしにそって八三段も語られていると考えられるのであるが、「絵合」からはこのまなざしが属する言説の「世界観」までもが窺える興味深い巻である。そこでもう少し「絵合」を検討してみる。

前掲の引用箇所における源氏の様子に着目する。源氏はこれら様々繰り上げられる「女言」を「をかし」く感じ、帝の前で決着をつけることを提案する。ここには帝の前で披露することによって、帝を楽しませようとする意図があったことが窺える。もともとこの物語絵合は、斎宮の女御と弘徽殿の女御との寵争いが発端である。帝からの寵愛をめぐって、それぞれの女御方が物語絵を素材に争う。この勝負事自体が遊宴性を持ち、帝を楽しませる遊びとして機能していくのである。

また「絵合」末尾からは、「女言」が帝を楽しませるための娯楽となり得たことと共に、こうした遊びが行われる時代は聖代として位置付けられていることが見て取れる。

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私さまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじきさかりの御世なり。

『源氏物語』絵合

公的な節会とともに「私さまの」「はかなき御遊び」が行われる時代、これこそ「さかりの御世」なのである。

以上、「絵合」から窺えたことをまとめておこう。中宮をも含めた女性同士の議論は、当時「女言」として定型的に認識されていた。またこれらは「をかし」きものであり、帝を楽しませる「遊び」としても機能した。さらにこうした「女言」を含めた遊びが行われる時代は、『源氏物語』において聖代として位置づけられていることである。

こうした「女言」とその遊びの言表が担う「世界観」を視野に入れ、八三段を再度眺めてみると、定子を中心として女房達が雪山存統の議論をする語り口が、「をかし」き「女言」の定型を模したものであることはすぐ

に了解されよう。またそこから雪山存続の議論を含めた一連の遊びが、帝を楽しませるような催しとしても機能しうること、さらにその属する言説性から、テクスト空間が聖代に基づく文化空間としての機能を帯びていることが指摘できよう。つまりここは、〈話者〉が聖代に基づく文化空間を〈世界観〉として持つ〈言表主体〉を演じることにより、如上の空間をテクスト上に構築しているのである。

こうした八三段が属する言説の位相を念頭に、本章段に認められる清少納言像を以下検討していく。

B、「すきもの」清少納言像

引用は雪山議論の後、十五日を待つ清少納言の様子である。

里にても、まず明るるすなはちこれを大事にて、見せにやる。十日のほどに、「五日待つばかりはあり」と言へば、うれしくおぼゆ。また、昼も夜もやるに、十四日夜さり、雨いみじう降れば、これにぞ消えぬらんと、いみじう、いま一日、二日も待ちつけでと、夜も起き居て言ひ喚けば、聞く人も、物狂ほしと笑ふ。人の出でていくに、やがて起きあて、下人起こさするに、さらに起きねば、いみじうにくみ腹立ちて、起き出でたる、やりて見すれば、「田座のほどなん侍る。木守いとかしこう守りて、「董も寄せ侍らず。明日、明後日までもさぶらひぬべし。禄賜はらん」と申す」と言へば、いみじううれしくて、いつしか明日にならば、歌よみて、物に入れて参らせんと思ふ。いと心もとなく、わびし。

暗きに起きて、折櫃など具せさせて、「これに、その白からん所入れて、

もて来。汚なげならん所かき捨てて」など言ひやりたれば、いととく、持たせたる物をひき下げて、「はやう失せ侍りにけり」と言ふに、いとあさましく、をかしうよみ出でて、人にも語り伝へさせんと、うめき誦じつる歌も、あさましうかひなくなりぬ。(八三段)

ここには「明るるすなはちこれを大事にて、見せにやる」「また、昼も夜もやる」「夜も起き居て言ひ喚けば」「やがて起きあて、下人起こさするに」「いみじうにくみ腹立ちて、起き出でたる、やりて見すれば」など、雪山の状態を非常に気に掛け、何度も確認させる清少納言の様子がつぶさに語られていく。こうしたある人物の行動を誇張増幅して語る語り口は、説話集にも散見される定型のものである。また、この語り口自体に批評性が込められているという議論も定説であろう。つまり本箇所では、雪の存続を異常に気にする側面が批評されているのである。ではこうした登場人物である清少納言は、いかなる〈言表主体〉により演じられているのだろうか。ここで引用中の「いつしか明日にならば、歌よみて、物に入れて参らせんと思ふ」に注目したい。ここから清少納言が、勝負に勝ち相応しい状況で歌を詠むことに固執していることが読み取れる。また「折櫃」の中に雪山を入れ歌を詠む趣向は、和歌世界において認められるものである。

雪山をつくりて、梅のつくり枝をうゑて、人人の歌などよむに

みやまぎにかかれるゆきははななれやむめとはかにぞわくべかりける

(高遠集・一〇九)

つまりここでの登場人物である清少納言は、あくまで和歌世界の人物として生きようとし、そこに「現実」を重ね合わせようとしているのである。

こうした清少納言像は、時代は少し下るが「すきもの」^{註12}といわれた人たちの語り口と同様のものと考えられる。以下用例を挙げて確認する。

次に挙げる①③は、①「白河の関」の歌に相応しいように、あたかもその場に行つて詠んだかのごとく日焼けをし、歌を披露した話。②「宮城野のもとあらの小萩つゆをおもみ風をまつこと君をこそまて」（古今集・恋四・六九四・題しらず・よみ人しらず）など、「歌枕」として著名な「宮城野」の「萩」を、都でちようと盛りとなるように持ち帰つた話。③東山に花見にいった実方が、実際に雨に濡れながら「ぬるとも花のかけにやどらん」と歌い、その話を聞いた行成が実方を「をこ」と称したという話である。

①能因は、いたれるすきものにてありければ、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

とよめるを、都にありながらこの歌をいださむことは念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠り居て、色をくろく日にあたりなして後、「みちのくにかたへ修行のついでによみたり」とぞ披露し侍りける。

〔古今著聞集〕巻第五

②為仲任はてて上りける時、宮城野の萩を掘り取りて、ながびつ十二合に入れてもてのぼり、都にて盛りなるべき比をはからひて上りければ、人あまねく聞きて、京へいりける日は、二条のおほちに、これを見物にして人おほく集りて、車なども数多たてたりけるとぞ。

〔無名抄〕

③昔、殿上のおのこども、花見むとて東山におはしたりけるに、俄心なき雨ふりて、人々げにさはぎ給へりけるに、実方の中將、いとさはがず、木

の本に立寄て、

桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花のかけにやどらん

と読て、かくれ給はざりければ、花よりもりくだる雨にさながらぬれて、装束しほりかね侍り。此事、有興ことに人々おもひあはれけり。またの日、斉信の大納言、主上に「かかる面白こと侍し」と奏せらるるに、行成、その時藏人頭にておはしけるが、「歌は面白し。実方はをこなり」と、の給てけり。此詞を実方もれきき給て、深く恨をふくみ給ぞと、聞え侍る。

〔撰集抄〕第一九話

これらの話から窺えるのは、和歌を詠むために、その観念としての和歌世界に自らの「現実」を重ね合わせようとする姿(①③)や、「宮城野」

「萩」のように地名と観念の結合が一般化し、「歌枕」^{註13}として観念化されてきた空間から実際に観念上の物質(萩)を持ち帰ってくるというような、前と同様に観念としての和歌世界に自らの「現実」を重ね合わせる一

姿(②)、またこうした姿は宮廷の(世界観)からすると「をこ」にもうつること(③)である。こうした「すきもの」像を念頭に八三段における清少納言を再度眺めてみると、本章段における清少納言が「すきもの」像にのつとつて構築されていることが了解されるだろう。また、こうしたあくまで詠歌状況や和歌世界に固執し、その(世界観)に生きる清少納言の様子が批評され、周囲から「物狂ほしと笑」われることも、前掲の「すきもの」の語り口と合致しているよう。すなわち本箇所は、数寄言説にのつとりながらテクスト世界が構築されているのである。

なおAにおいて指摘した「深うよしづきたる」藤壺像と、本項の分析から窺えた登場人物である「すきもの」清少納言像を比較してみると、雅な遊びではあるが新鮮味に欠ける雪山作りに対して、「すきもの」清少納言

は、あくまで雪山存続期間をめぐる議論の勝負にこだわり、和歌の世界の「世界観」に生きることによって、「世に古りたる事」を「めづらし」き遊びとしていくのである。

次項では、この「すきもの」清少納言像と聖代に基づく文化空間との関係および「雪山」章段における〈話者〉の位相を検討する。

C、「雪山」章段の言説空間

このように「すきもの」として語られる清少納言なのであるが、次の引用箇所ではその「をこ」の側面が顕著に語られている。

内より仰せごとあり。「さて、雪は今日までありや」と仰せごとあれば、いとねたうくち惜しけれど、一年の内、ついたちまでだにあらじと、人々の啓し給ひしに、昨日の夕暮まで侍りしは、いとかしこしとなん思う給ふ。今日までは、あまり事になん。夜のほどに、人のにくみて取り捨てて侍る、と啓させ給へ」など聞えさせつ。

廿日、参りたるにも、まづこの事を、御前にても言ふ。「身は投げつ」とて、蓋の限り持てきたりけん法師のやうに、すなはち持て来しが、あさましかりしこと、物の蓋に、小山作りて、白き紙に、歌いみじう書きて、参らせんとせしことなど啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひたることを、違へつれば、罪得らん。まこととは、四日の夜、侍どもをやりて、取り捨てしぞ。返り事に言ひ当てしこそ、いとをかしかりしか。その女出で来て、いみじう手をすりて言ひければ、「仰せごとにて、かの里より来たらん人に、かく聞かすな。さらば、

屋うち壊たん」など言ひて、左近の司の南の築土などに、皆捨ててけり。「いと固くて、多くなんありつる」などぞ言ふなりしかば、げに廿日も待ちつけてまし。今年の初雪も降り添ひてなまし。上も聞こし召して、「いと思ひやり深くあらがひたり」など、殿上人どもなどにも仰せられけり。

さて、その歌語れ。今はかく言ひあらはしつれば、同じこと。勝ちたるなり」と、御前にも仰せられ、人々も宣たまへど、「なせうにか、さばかり憂き事を聞きながら、啓し侍らん」など、まことにまめやかに倦じ、心憂がれば、上も渡らせ給ひて、「まことに、年ごろは、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」など仰せらるるに、いとと憂くつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いで、あはれ。いみじく憂き世ぞかし。後に降り積みて侍りし雪を、うれしと思ひ侍りしに、「それはあいなし、かき捨てよ」と仰せごと侍りしよ」と申せば、「勝たせじ、とおぼしけるなり」とて、上も笑はせ給ふ。

(八三段)

引用箇所は、雪がなくなつた後の清少納言と定子、また帝とのやりとりの場面。まず本場面における定子像について検討する。ここで定子は、自分で雪を捨てておきながら「さて、雪は今日までありや」と仰せごとを出す。まことに清少納言の反応を楽しんでいるかのように語られていると言えよう。さらに定子は、清少納言が参内して語る「をこ」語りを楽しむのである。こうした定子の意地悪ととれる態度や帝の発言(「まことに、年ごろは、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」)から、他章段における定子像との違いを見て取り、従来様々な解釈がなされてきた¹⁴⁾。本稿では、文末の帝の言葉「勝たせじ、とおぼしけるなり」に着目することによって、テキスト上に構築されている定子像について私案を述べたい。

文末の帝の発言は、直前にある清少納言の発言（「後に降り積みて侍りし雪」に対して、定子が「それはあいなし、かき捨てよ」と仰せごと」をしたこと）に対する返答。ここには本章段において認められた「すきもの」清少納言と同様、雪山の勝負に対して必死になる定子の姿がかいま見られよう。つまり帝の立場からは、雪山の勝負に関して定子と清少納言が同列に捉えられていたということである^{注1}。ここから、帝を中心に頂きそのもとで定子と清少納言が「をこ」となり楽しませるといった構図が看取されよう。なおこうした様相は、すでにAにおいて指摘した、雪山存続の議論を含めた一連の遊びが、帝を楽しませるような催しとしても機能しうることに一致してこよう。すなわち「雪山」章段は、雪山作りおよび「をかし」き「女言」の定型を模した雪山存続の議論といった一連の雅な遊びの延長線上に、数寄言説に基づき雅を志向する「すきもの」清少納言および定子像が「言表主体」によって演じられ、その両「すきもの」が帝の笑いを生みだしていく様を語ることによって、聖代に基づく文化空間をテクスト上に構築しているのである。本テクスト上では、通常共同体から笑われることよって排除されていく「すきもの」も帝を中心とする「世界観」の中に位置付き、その「世界観」を強固なものとしていくのである。こうした「世界観」の中に「話者」は住まい、テクスト世界を構築していると言えよう。

四、おわりに

本稿は、外部諸テクストとの関連を視野に入れて『枕草子』の表現を考察したものである。扱った資料が文学テクストに限られているため、時代

の言説空間と『枕草子』の関わりを十分に論じきれないことが今後の課題として挙げられよう。しかし外部諸テクストとの関連から『枕草子』を捉えていく可能性については、本稿において提起できたのではないかと考える。

なお「雪山」章段は、常陸の介や齋院とのエピソードなど、本稿で扱えなかった課題が山積している。特に常陸の介は、本稿で分析した「すきもの」清少納言と大きく関連していると考えられる。これらの問題については稿を改めて論じる予定である。

注

注1 小森潔「異化するテクスト枕草子―「大進生昌が家に」の段をめぐって―」『日本文学』一九九三・一二。

注2 三田村雅子氏は「枕草子の「日記的章段」が単なる日々の記録でも、史実のなだれこみでもない、独自の論理による小宇宙であって、積極的な「虚構」とまではいえないとしても、素材の選択、配列、構成、提示のしかた、において自立した表現世界をつくり上げている」（『解説』『枕草子 表現と構造』日本文学研究資料 新集4、一九九四・七、有精堂、P259）ものとして『枕草子』を捉え、ここから「現実と拮抗し、独自の論理で現実を再構成していく、枕草子の「語り口」、枕草子の「方法」」（前掲書^{P260}）を論じていく。なおこうした『枕草子』におけるテクスト論的研究は、三田村雅子「枕草子を支えたもの―書かれなかった「あはれ」をめぐって（上）（下）―」（『芸と批評』一九七四・一一、一九七五・八）、原岡文子『枕草子』日記的章段の笑いについての「一試論」（『平安文学研究』第57輯、一九七七・六）らがその嚆矢と言えよう。

注3 例えば前掲の小森氏は『枕草子』の〈読み〉を通じて、『枕草子』が既存の価値観をいかに逸脱しているかを論じていく。

注4 ここで用いる〈世界観〉とは、以下の論者の考えを参考としている。

「記述的あるいは「人類的」意味でいうイデオロギーとは、ある種の社会集団や階級に固有の信念体系であり、ディスクリブル的要素と非ディスクリブル的要素の両方からできている。この政治的に中立なイデオロギー定義は、すでにみてきた「世界観」の概念に近い。複数の個人からなる集団に固有の信念や認識や行動に対し、「枠組み」となるものを提供する一連のカテゴリー、それも比較的よくシステム化されたカテゴリー、それが「世界観」である」

(テリー・イーグルトン『イデオロギーとは何か』)

大橋洋一訳、一九九六・三、平凡社。p86)

「世界観」の解釈の基となる、個人が属する社会集団に共有されている枠組みの〈意味〉を、ここでは〈世界観〉とよぶことにする」

(山本耕一『権力 社会的威力・イデオロギー・人間生態系』、

一九九八・五、状況出版。p141)

なおここで用いられている〈世界観〉とは、あくまで「枠組み」(カテゴリー)のことを指す。なおこの〈世界観〉とは、実際の言表が編成されることによつて構築され、不断にその周縁(縁)を変形させていく言説の、価値的な一局面を取り出したものであると言つてよいだろう。

注5 内田隆三「フーコーの望遠鏡」『思想』一九八四・四。なお内田氏の論考は、ミシェル・フーコーの考えを内田氏なりにまとめたものである。

注6 〈話者〉の定義は『読むための理論—文学・思想・批評』(「主体性」の項(島村輝執筆)、一九九一・六、世織書房)を参考にした。

「文学テキストにあらわれる多様な他者の言葉を一定の方向性のもとに統合

する言表主体としての(話者)(中略—引用者)(話者)とは、(語り手)と作中人物らの—引用者注)葛藤や変化をもその下に収めた、文学テキスト全体の構造から抽出される上位概念としての言表主体であるといつてよい。それは(語り手)や会話の言葉をその時々演じる、場面場面によつて多様な貌をもった言表主体である」(p68~p69)

ここでは「文学テキスト全体の構造から抽出される上位概念」として(話者)を設定し、この(話者)が「(語り手)や会話の言葉を」「場面場面によつて」様々に演じていくもの、として捉えられている。こうした議論は、語り手をも視野に入れたテキスト自体が持つ「主体」の在り方を問うていくための方法として提出されている。

注7

〈言表主体〉の定義については、前掲の『読むための理論—文学・思想・批評』と共に、中川久嗣「フーコーの『知の考古学』における言表/言説の実一性について」『哲學』一九九八・四)を参考にした。なお『読むための理論—文学・思想・批評』における「言表主体」とは、〈話者〉をも含む言語行為主体という意味で用いられている。つまりここで「言表主体」と〈話者〉は同位相にある。しかしでは、あくまで〈言表主体〉はその都度(話者)が演じるものである。そうした折々の〈言表主体〉を演じるることによつて、〈話者〉は同時代の言説空間と対話、もしくは認知参照という行為を営んでいる訳である。すなわち〈話者〉と〈言表主体〉とは位相を異にしているのである。

注8 テキストは和泉古典叢書『枕草子』(増田繁夫校注)を使用した。なお、章段の区分も和泉古典叢書に従う。

注9 河内山清彦「枕草子」『雪山』の段の構成『解釈』一九七六・三)は、「雪山」章段を「雪山の賭けに関する主要事件を基軸に据え」「乞食尼常陸介関係」「式部丞忠隆関係」「齋院関係」の「三つのエピソードを織り込んだ構

成」とする。

注 10 三田村雅子「回想の論理―「職の御曹司におはします頃」章段の性格―」

『枕草子表現の論理』所収、p89、など。

注 11 和泉古典叢書『枕草子』（増田繁夫校注）当該章段頭注などが指摘している。

注 12 「すぎもの」についての考え方は小町谷照彦「和歌的幻像の追求―能因法師

論ノート―」（『日本文学』一九七〇・七）を参考にした。

注 13 「歌枕」の捉え方は小町谷照彦「古今集の歌枕―和歌表現論序説―」（『日本

文学』一九六六・八）、片桐洋一「歌枕の成立―古今集表現研究の一部として―」（『国語と国文学』一九七〇・四）などを参考にした。

注 14 例えば河内山清彦「枕草子『雪山』の段の構成」（『解釈』一九七六・三）は、

ここから定子空間から清少納言が孤立しないための定子の配慮を読み取る。

注 15 ここで定子の行為に対して敬語が用いられているが、そうした社会的な位置

ではなく、あくまで「雪山」の勝負に関して同列に扱っているのである。

使用テキスト

和泉古典叢書『枕草子』

日本古典文学全集『源氏物語』2

『新編国歌大観』巻第三私家集編

新潮日本古典文学集成『古今著聞集』

『無名抄全講』 築瀬一雄著

古典文庫『撰集抄』下